

宮崎市文化財調査報告書第50集

江田原第3遺跡

～北権現通線道路改築工事に伴う発掘調査報告書～

2002

宮崎市教育委員会

序

今日、各地で宅地造成、道路整備、圃場整備などの土地開発が行われています。その中で、私たちの祖先の暮らしを知る貴重な遺跡や遺物も数多く発見されています。しかし、土地開発が進むに従って多くの遺跡が消滅せざるをえない状況になっています。遺跡や遺物は、先人が残した文化遺産です。これらを保存し積極的に活用して、現代の私たちの生活に役立てていくことが必要であると考えています。

本書は、江田原第1遺跡、櫛遺跡、櫛1号墳など多くの遺跡を有する江田原地区において、平成13年度に北緯現通線道路改築工事に伴い、発掘調査を実施した江田原第3遺跡の調査報告書であります。調査区は住宅地の中にあり、多くの方々から関心を寄せさせていただきました。

この報告書が学術研究や郷土の歴史を理解するための資料として、また、埋蔵文化財保護と理解のために役立てば幸いです。

最後になりましたが、地元の方々はじめ、発掘作業に従事していただいた皆様、関係者各位のご協力とご理解を厚くお礼申し上げます。

平成14年1月

宮崎市教育委員会

教育長 内藤泰夫

例　　言

1. 本書は、市道北権現通線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、平成13年4月23日～5月22日までの期間に、宮崎市教育委員会が実施した。
3. 調査主体 宮崎市教育委員会

調査総括	文化振興課	係長	永井　淳生
庶務担当		主任主事	竹野　隆司
調査担当		技師	稲岡　洋道
		技師	宇田川美和
		嘱託	川原　愛
		嘱託	門田奈津子
整理担当		嘱託	椎　由美子
		嘱託	佐藤小夜子
		嘱託	熊田原被義

4. 本書の執筆・編集は稲岡・川原が行った。
5. 掲載図面の実測・製図・図版の作成は、稲岡・宇田川・川原・門田・椎・佐藤・熊田原が行った。
6. 現場での写真撮影は、稲岡が行った。
7. 本書で使用した空中写真は、有限会社スカイサーベイ九州によるものである。
8. 本遺跡出土遺物は、宮崎市教育委員会が保管している。
9. 本書実測図中で使用した遺構略号は、以下のとおりである。
S E - 溝状遺構　S C - 上坑
10. 実測図中の[]、[]は、搅乱である。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の結果	5
第1節 調査の概要	5
第2節 遺構について	5
第3節 遺物について	7
第Ⅲ章 まとめ	16

挿図目次

第1図 江田原第3遺跡位置図	3
第2図 江田原第3遺跡周辺図①	4
第3図 江田原第3遺跡周辺図②	6
第4図 江田原第3遺跡遺構配置図	6
第5図 上坑実測図	8
第6図 SE1遺物出土状況	9
第7図 SE1実測図	10
第8図 出土遺物実測図①	12
第9図 出土遺物実測図②	13
第10図 出土遺物実測図③	14
第11図 江田原第3遺跡周辺古墳分布図	18

表目次

第1表 出土遺物觀察表	15
第2表 江田原第3遺跡周辺古墳一覧	17

図 版 目 次

図版1	江田原第3遺跡周辺	19
図版2	江田原第3遺跡全景	20
図版3	SC1完掘状況	21
図版4	SC2完掘状況	21
図版5	SC3完掘状況	21
図版6	SC4遺物出土状況	22
図版7	SE1遺物出土状況①	22
図版8	SE1遺物出土状況②	22
図版9	SE1遺物出土状況③	23
図版10	SE1遺物出土状況④	23
図版11	SE1遺物出土状況⑤	23
図版12	SE1遺物出土状況⑥	24
図版13	SE1遺物出土状況⑦	24
図版14	SE1遺物出土状況⑧	24
図版15	SE1遺物出土状況⑨	25
図版16	SE1遺物出土状況⑩	25
図版17	SE1完掘状況	25
図版18	出土遺物①	26
図版19	出土遺物②	27

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

江田原第3遺跡は宮崎市吉村町の住宅地内に存在する。宮崎市街路公園課では住宅地内を東西に走る北権現通線道路改築事業を平成10年度から開始した。吉村地区には櫛遺跡、櫛1号墳等多くの周知の遺跡が存在していることから、文化振興課では、工事着手前の平成12年3月14日、11月30日に2回に分けて試掘調査を行った。その結果、古くから住宅地となっていたため、多くの試掘トレーンチでは土壌の削平、攢乱著しく遺構、遺物は確認されなかつたが、2回目の11月30日において旧住宅地一戸分の範囲で溝状遺構を検出し、土師器、須恵器が伴つて出土した。よつて文化振興課では、遺構が検出された旧一戸分の宅地のみを工事着手前に本調査が必要である旨を街路公園課あてに回答した。その後、平成13年4月16日付けで「文化財保護法57条の3第1項の規定」の工事通知の届出があり、平成13年4月23日～平成13年5月22日の期間発掘調査を実施した。

第2節 遺跡の立地と歴史的環境

江田原第3遺跡は、大淀川左岸の沖積地に位置する。この一帯には、大淀川と平行に流れる新別府川以北に、海岸線に沿つた4本の砂丘列が走つており、形成された順に内陸から第1砂丘（櫛一大島砂丘）、第2砂丘（江田原一山崎砂丘）、第3砂丘（防潮林一五厘橋砂丘）、第4砂丘（住吉浜一ツ葉浜）と呼ばれている。これらの砂丘は、東側は急斜面、西側は緩やかな斜面になつておつり、東側に波が打ち寄せるところのような現象が起つる。第1砂丘、第2砂丘、第3砂丘も直接波が打ち寄せていた砂嘴であったと考えられ、繩文海進とその後の海退によつて形成されたと考えられている。江田原第3遺跡は、約3,000年前までに形成された第1砂丘上に立地する。

現在砂丘と砂丘の間は、南北に細長い水田地帯となつてゐるが、この一帯は砂丘形成当時、入江であったと推定される。繩文期の海退や大淀川の変容によつて流れてくる土砂などによつて堆積が進み、入江は徐々に陸化して低湿地となつた。この自然環境は、初期農耕段階において、小規模の水田地帯を形成するのに格好の条件である。第1砂丘の西側にある浮ノ城遺跡では、弥生時代中期から後期の水田址が、第1砂丘と第2砂丘の間に位置する櫛北小学校校庭遺跡では、奈良時代の水田址が確認され、共に砂丘に立地する集落の生産の場であったと考えられる。

第1砂丘には、本遺跡の北方約1.5kmに萩崎第1遺跡と第2遺跡、北西約500mに平原第1遺跡と第2遺跡、南西約150mに江田原第1遺跡、南西約350mに江田原第2遺跡、南方約600mの砂丘根幹部に櫛遺跡と櫛1号墳が存在する。萩崎第2遺跡では、溝状遺構が1条検出され、その東側から7世紀前葉～中葉に比定される土師器の甕1個体が出土した。江田原第1遺跡からは、溝状遺構、竪穴状遺構、土坑が検出され、古墳時代の終末期から奈良、平安時代の土器が出土している。櫛遺跡は、昭和26、27年に櫛中学校の校舎東斜面から小児用甕棺が発見され、昭和

31年から3次にわたる発掘調査が行われた。調査では、弥生時代前期の積石墓9基及び小児用
壇棺墓3基が検出された。橿1号墳は、橿中学校の南側に隣接する前方後円墳である。平成6年に、
宮崎大学教育学部考古学研究室によって墳丘測量が行われ、平成12年の1次・2次調査では、
前方部前端、東西のくびれ部、前方部側辺の墳端、前方部前面の位置が確認された。その結果、
墳形は、墳長約50m、前方部長約17mと前方部の長さが異常に短く、左右非対称ながら前端に
向かって大きく開くことも明らかとなった。後円部の平面形も倒卵形の可能性が高まり、纏向
型類型の特徴を備えることが確実となった。江田原・麗地区や村角・大島地区、下原地区など
の第1砂丘・第2砂丘を中心広がる地域には、橿1号墳も含めた前方後円墳2基・円墳8基から
なる橿古墳群が存在する。橿古墳群は、牛目古墳群や下北方古墳群のような台地上に築造され
た古墳に対し、最も海岸線に近い古墳群として注目される。

第2砂丘には、本遺跡の北北東約1.9kmに石神遺跡、北北東約1.3kmに猿野遺跡が存在する。
石神遺跡からは、弥生時代中期から後期初頭にかかる壇棺墓、壺棺墓、竪穴住居の一部、溝状
遺構が検出され、土器、石器、軽石製品、土製品が出土した。砂丘頂部近くに埋葬地、低湿地
である砂丘後背地が主要生産地、それらに沿って住居地域が広がっていたものと思われ、この
地域の集落における住居・生産・埋葬のあり方を示唆する遺跡である。猿野遺跡からは、11軒
の竪穴住居と3条の溝状遺構が検出され、布留式併行期の土器が出土した。その他にも弥生時
代中期前半の土器や瓦、古代～中世の土師質上器や瓦器等も出土していることから、長期間に
わたって生活の場であったと考えられる。

江田原第3遺跡から新別府川をはさんで、南西約1.8kmに大町遺跡、南方約1.5kmに北中遺跡
が存在する。大町遺跡では、63軒の竪穴住居、弥生時代に属する3棟の掘立柱建物、3基の周
溝状遺構などが検出された。竪穴住居は、その出土遺物から2軒が弥生時代中期末～後期初頭
に比定された。時期の特定ができない数軒を除いた大半は、6世紀中頃～7世紀前半に比定され、
その中心は、6世紀後半～7世紀初頭にあるとみられる。北中遺跡は、平成9年度と平成12年度
に調査が行われた。調査では、古墳時代前期末から中期初頭の竪穴住居1軒、古墳時代後期を
中心とした16軒の竪穴住居や地下式横穴墓10基、竪穴状遺構、溝状遺構、近世の土坑墓や溝
状遺構が確認された。(註1)

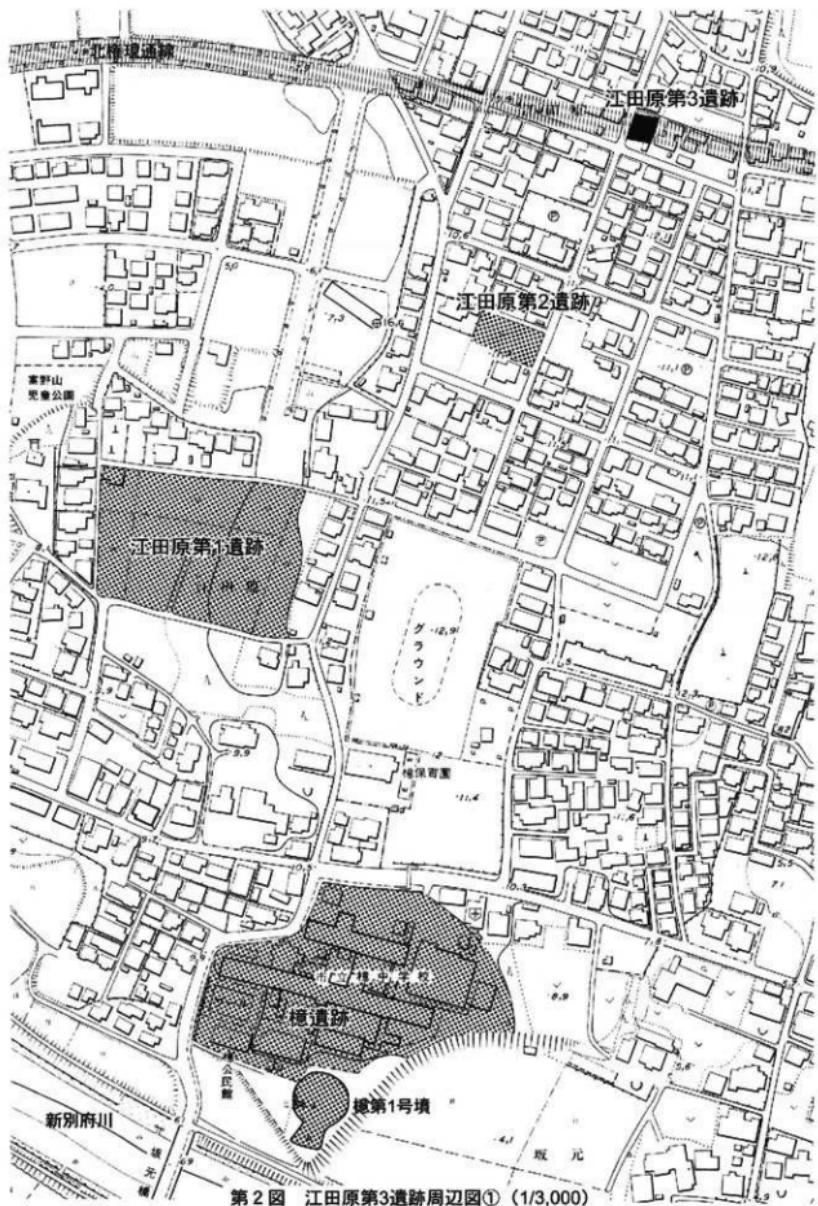
(註1) 北中遺跡の平成12年度調査は、平成13年度に報告予定。

【参考文献】

- | | |
|------------|---|
| 宮崎県 | 『宮崎県史』 資料編 考古1 1989 |
| 宮崎県 | 『宮崎県史』 資料編 考古2 1993 |
| 宮崎県 | 『宮崎県史』 通史編 原始・古代 1998 |
| 宮崎市教育委員会 | 『石神遺跡発掘調査報告書』 宮崎市文化財報告書第1集 1973 |
| 宮崎市教育委員会 | 『吉村町第二十地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 浮ノ城遺跡』 1986 |
| 宮崎市教育委員会 | 『柿木原地下式横穴墓56-1号・江田原第1遺跡』 1989 |
| 宮崎市教育委員会 | 『猿野遺跡・萩原第2遺跡』 1996 |
| 宮崎市教育委員会 | 『大町遺跡』 1998 |
| 宮崎市教育委員会 | 『北中遺跡』 1999 |
| 櫛振興会 | 『櫛郷土史』 1990 |
| 九州前方後円墳研究会 | 『九前研通信 第7号』 2001 |



第1図 江田原第3遺跡位置図 (1/25,000)



第2図 江田原第3遺跡周辺図① (1/3,000)

第II章 調査の結果

第1節 調査の概要

江田原第3遺跡は宮崎市古村町江田原甲207番12に所在する。調査面積は136m²で、平成13年4月23日～平成13年5月18日の期間発掘調査を実施した。調査地は試掘調査で遺構の確認されたエリアのみを調査対象とした。調査対象外のエリアは宅地開発によるものと考えられる土壌削平が著しく遺構、遺物は確認されなかった。現況でも調査対象となった一戸分の旧宅地は周囲の宅地、道路よりも50cm程高く、その分包含層が守られている。

江田原第3遺跡の基本層序は以下のとおりである。I層表土(7~22cm)、II層黄色粘質土(5~17cm 客土)、III層灰砂質土(14~35cm 客土)、IV層黄色砂質土(0~5cm 客土)、V層暗褐色砂質土(0~12cm暗褐色、灰色の1~3mm程のスコリア〔軽石〕を僅かに含む)、VI層黒褐色砂質土(0~10cm)、VII層黄褐色砂質土(0~20cm)、VIII層白色砂質土(20cm)となり、以上挙げた層序のうち、I~IV層までは客土で、V層以下が自然堆積土壌だと考えられる。これら、V層以下の土壌は全く粘性のない土質で云わば海岸の海砂のような状態である。

表土剥ぎは客土と考えられるIII層及びIV層までを除去した。その結果、調査区約東半分にはIII層が厚く堆積しており、元々は平坦な宅地であった調査区を表土除去後には西から東に向かって下る地形に変化させていた。表土除去後、V、VI層は調査区北側と南側の一帯で、VII層は調査区西側2/3、VIII層は調査区東側1/3で露出していた。

遺構検出時においては地表面が乾燥すると調査区一面が白く変化し、日に何回も水を撒き地面に十分水を含ませないとライン引き、掘り下げが非常に困難であった。

第2節 遺構について

(1) 土坑

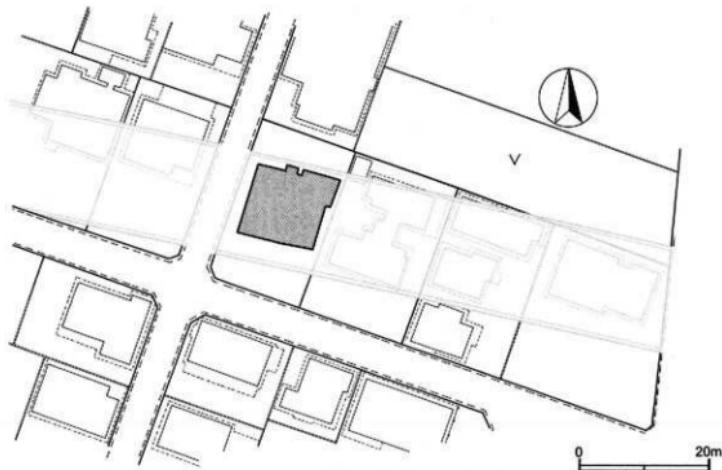
SC1(第5図) 調査区の東側、VIII層上面で検出された。SE2の東0.2mで検出され、長径1.46m、短径1.18m、深さ38cmを測る。埋土は暗褐色砂で、遺物は出土していない。

SC2(第5図) 調査区の東側、VIII層上面で検出された。長径1.36m、短径0.88mの南北に長い横円形を呈し、深さ32cmを測る。埋土は暗褐色砂で、遺物は土師器の小片が1点出土したのみである。

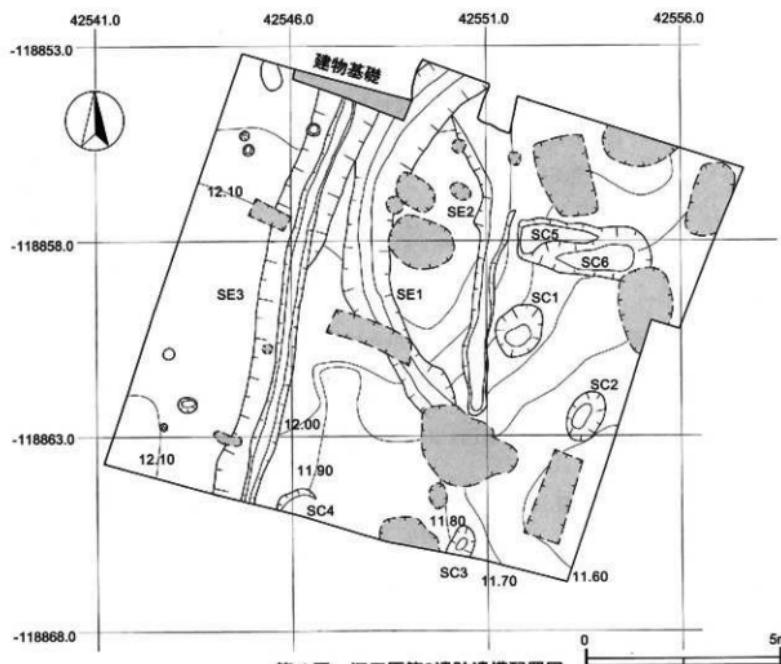
SC3(第5図) 調査区の南側、VIII層上面で検出された。土坑の南側は調査区外にかかる。東西径0.64m、南北径0.78m以上、深さ30cmを測り、埋土は暗褐色砂で、遺物は出土していない。

SC4(第5図) 調査区の南側、VII層上面で検出された。土坑の南側は調査区外にかかり、東側は攪乱に切られる。深さは、約7cm。埋土は暗褐色砂で、スコリア等の不純物は見られない。遺物は土師器の高杯の杯部のみがほぼ完全な形で出土した。

SC5(第5図) 調査区の東側、V層上面で検出された。SC6に切られている。最大幅2.5m以上、



第3図 江田原第3遺跡周辺図②



第4図 江田原第3遺跡遺構配置図

深さ20cm、埋土は灰色砂である。遺物は出土していない。

SC6（第5図）調査区の東側で、V層上面で検出された。SC5を切る。最大幅2.2m以上、深さ35cmを測り、埋土は粘性のある黒色砂である。遺物は出土していない。

（2）溝状遺構

SE1（第6図・第7図）調査区のはば中央を、南北方向に弧を描きながら走る。VII層上面で検出された。北端は調査区外にかかり、一部SE3に切られ、南端は擾乱に切られている。幅約2m、最深20cm、今回確認できた長さは約10mである。埋土は黒色砂質土と暗褐色砂質土。遺物は、土師器の甕1点、壺3点、碗2点、高坏14点、須恵器の甕の碎片1点、甕3点（うち2点は同一個体）が出土した。

SE2（第4図）調査区の中央を南北に走る。VII層上面で検出された。北端をSE1と擾乱に、南端を擾乱に切られる。最大幅0.97m、最小幅0.5m、最深20cmで、今回確認できた長さは8.2mである。埋土は暗褐色砂で、暗赤褐色と灰色のスコリア（1~3mm）を僅かに含む。遺物は出土していない。

SE3（第4図）調査区の西側を南北に走る。VII層上面で検出された。南北両端とも調査区外にかかる。最大幅1.6m、最小幅1.1m、最深65cmで、今回確認できた長さは約10.7mである。埋土は暗褐色砂だが、SE2に比べ色が薄く、灰色のスコリア（2~5mm）を僅かに含む。遺物は、須恵器の甕1点と壺1点の碎片と土錘1点が出土した。

第3節 遺物について

遺物が出土した遺構は、SC2・SC4・SE1・SE3で、そのうち実測可能な遺物は、SC4・SE1・SE3から出土した土師器21点、須恵器6点、土錘1点と遺構外から出土した鉄器4点のみである。

土師器のうち15点は高坏で、SC4から1点とSE1から14点出土した。高坏は坏部が7形態、脚部が4形態ある。（第8図1~8~9 第9図10~21 1と18~21は、坏部のみ残存）

坏部 A類 坏部が深く、体部に稜を持ち、口縁が直線的に開く。(1)

B類 坏部が深く、体部に不明瞭な稜を持ち、口縁が外反して開く。(8~18)

C類 坏部が深く、体部に不明瞭な稜を持ち、口縁が直線的に開く。(9~10~11)

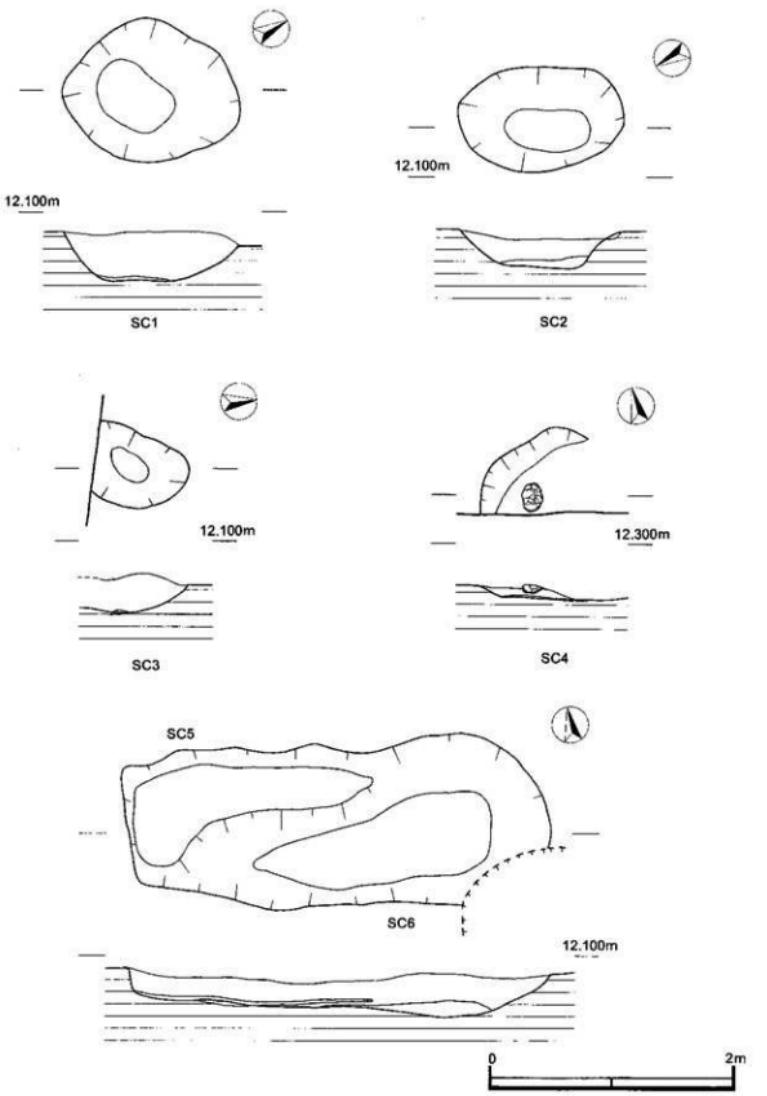
D類 坏部が浅く、体部に不明瞭な稜を持ち、口縁が内湾して開く。(12)

E類 坏部が浅く、体部は稜を持たず内湾し、口縁が直線的に開く。(13~14~15~20)

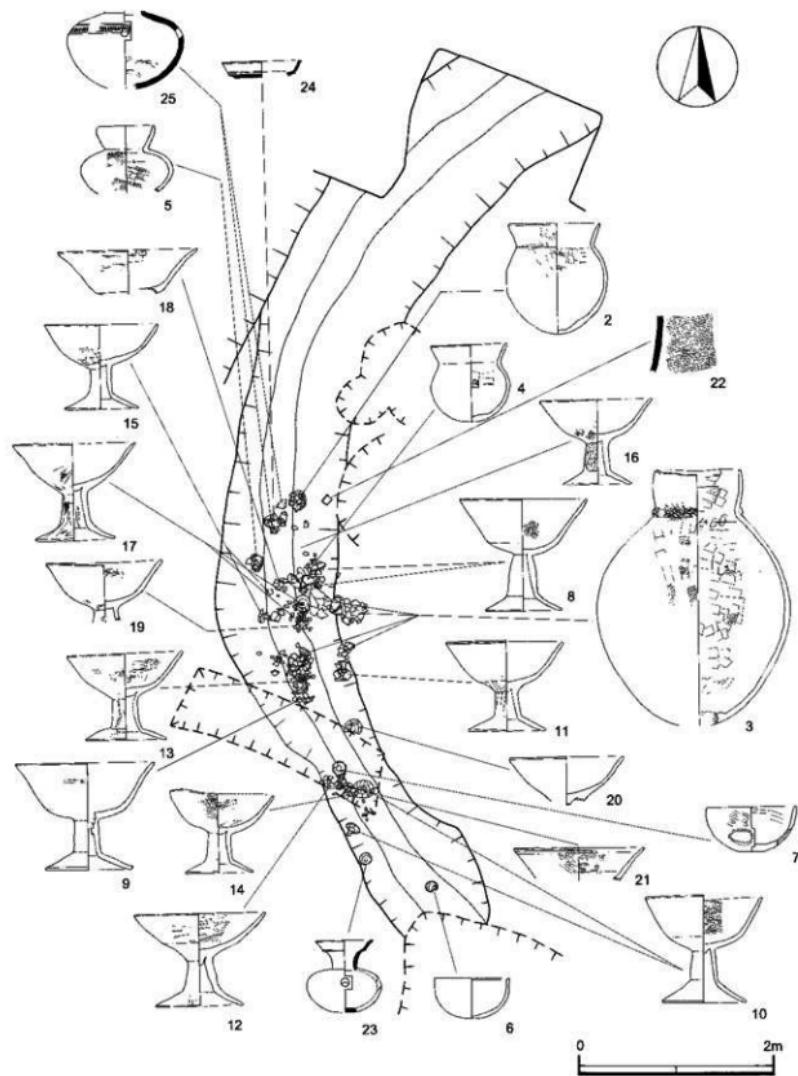
F類 a 坏部が深く、体部は稜を持たず内湾し、口縁が外反して開く。(17~19)

F類 b 坏部が浅く、体部は稜を持たず内湾し、口縁が外反して開く。(16)

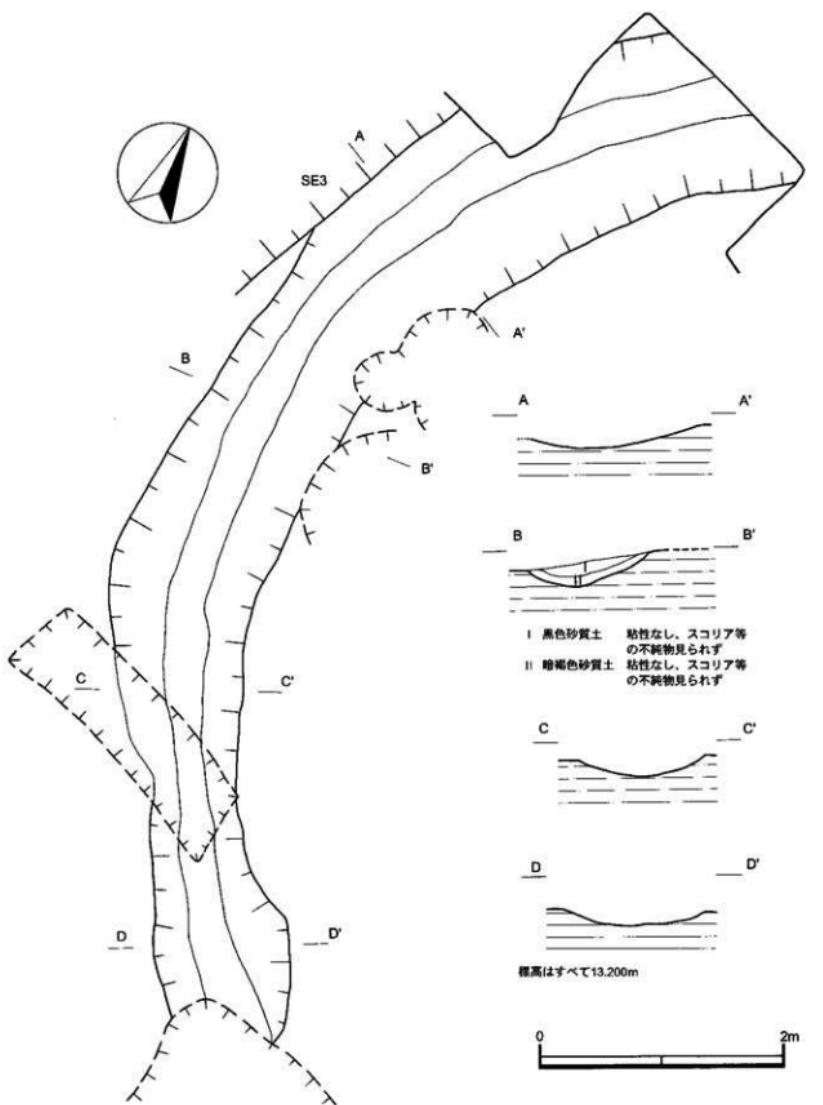
脚部 I類 エンタシス状の脚柱部を有し、裾部が直線的に開く。(9)



第5図 土坑実測図



第6図 SE1遺物出土状況 (1/50)



第7図 SE1 実測図 (1/40)

II類 脚柱部と裾部の境に稜を持ち、裾部が直線的に開く。(8・10・11・14・16)

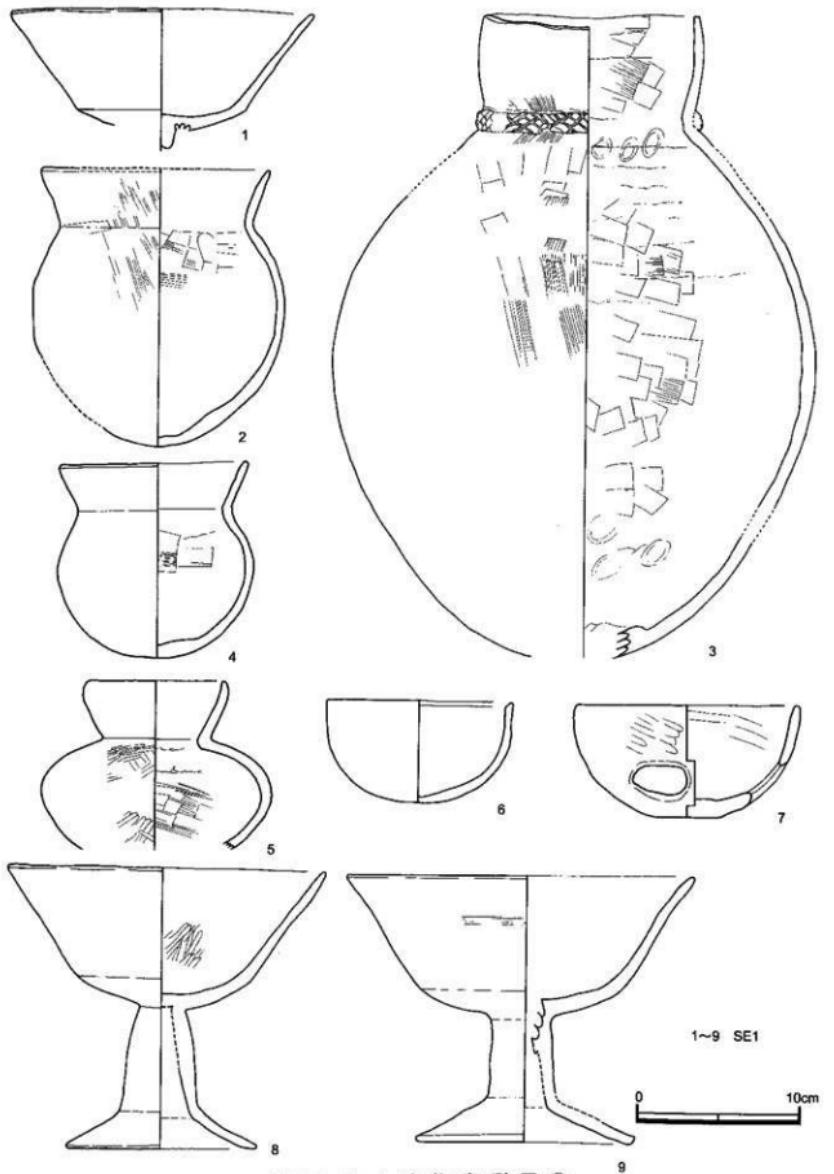
III類 脚柱部と裾部の境に稜を持ち、裾部が内湾しながら開く。(13)

IV類 脚柱部と裾部の境に稜を持たずに開く。(12・15・17)

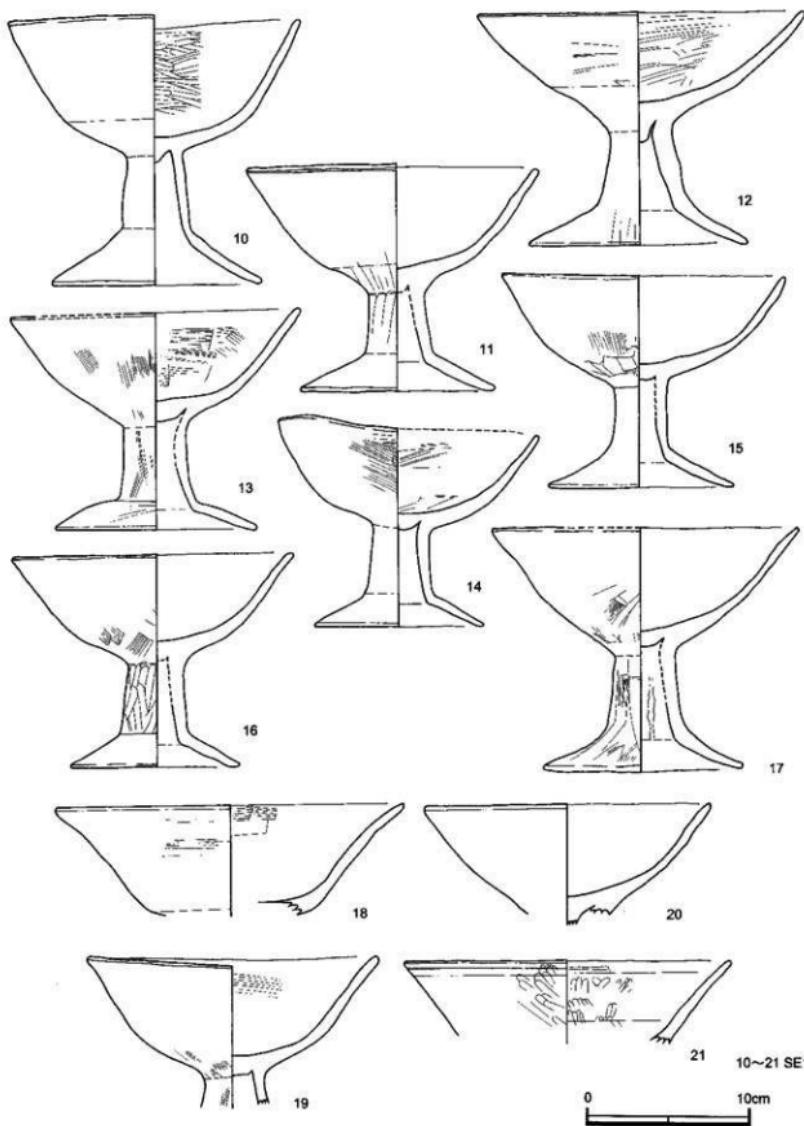
SE1出土遺物（第8～10図）2～7は、土師器である。2は甕で、底部は丸底。一部に煤の付着が見られる。胴部は球形を呈し、口辺部は頸部から僅かに外反しながら開く。3～5は壺で、3は胴部が倒卵形を呈し、底部は丸底。口辺部は内湾しながら直立し、頸部には、刻目突帯が施される。4は内外面共に赤彩が施されており、底部は丸底で、胴部は球形を呈する。口辺部は頸部から直線的に開き、口縁端部には面を作っている。5の胴部は、胴中半部に最大径を持つ、梢円形を呈する。口辺部は頸部から直線的に開き、口縁部で内湾する。口辺部内面から胴上半部外面にかけて赤彩が施されている。6・7は塊で、底部から体部にかけて緩やかなカーブを描いて立ち上がり、口辺部は直線的に伸びる。6の底部は丸底で、口縁部の端部に面を持つ。7は平底で、体部下半部に直径3.4cm短径1.7cmの梢円形の穿孔が施されている。8～21は高杯である。それぞれの形態については、この節のはじめで分類した通りである。その他の特徴として、11・21は口縁部に沈線を持つこと、8・10～17・19・21には赤彩が施されていることが挙げられる。22～25は、須恵器である。22は甕の胴部で外面に平行タタキが施されている。23～25は、甕である。23は口頸部に突帯が巡り、胴部中半部に最大径を持つ。内外面共にナデ調整で、内面から肩部にかけて自然釉がかかっている。24・25は同一個体である。24は口辺部で、口唇部は僅かに窪み、口縁部には柳描波状文が施され、口頸部に突帯が巡る。柳描波状文と突帯の間には、浅い沈線が施され、突帯の下部にカキ目調整が見られる。25は胴部で、肩部には工具による刻目とその上下に極浅い沈線が巡る。内面から肩部にかけて自然釉がかかる。内面から肩部にかけて自然釉がかかる。

SE3出土遺物（第10図）26・27は、須恵器である。26は甕の胴部で、外面に格子目タタキが施される。27は、壺の口辺部で、突帯を持ちその下部に柳描波状文が施されている。28は、土錐である。平面形は丸みを帯びた長方形で、長さ6.6cm、幅4cm、重量97.9g。4箇所に穿孔を施す。両面の中央には、長辺に対して平行に幅約5mmの浅い溝状の窪みがある。

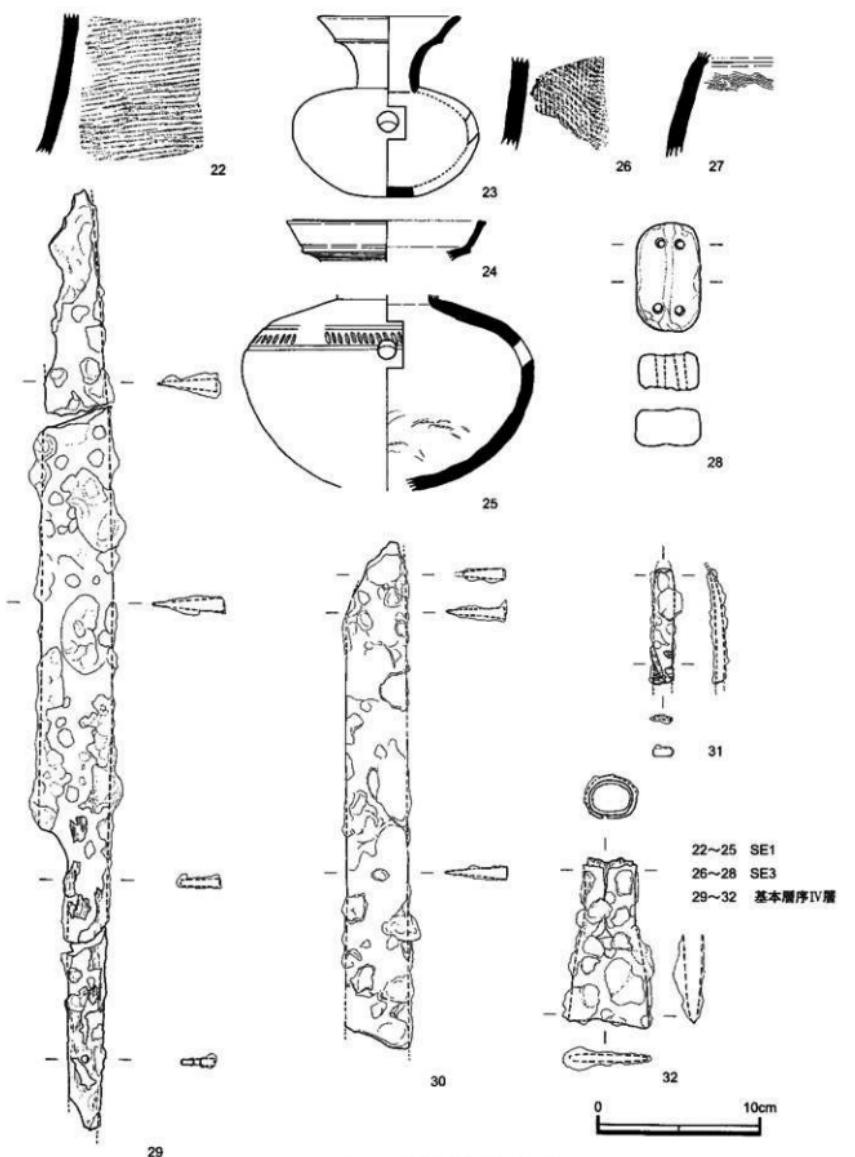
遺構外出土遺物（第10図）29～32はIV層黄褐色砂質土出土の遺物である。IV層までは客土であるため、これらの遺物は遺構破壊によって定位位置から動いていることが考えられるが、出土位置はすべて調査区北東部分に集中する。29・30は、直刀である。29は鉋部と茎端部が欠けており、現存長57.8cm、刃部最大幅4.3cm、刃部最大厚0.95cm、茎幅1.0～2.6cm、茎厚0.5cmを測る。茎部には目釘穴が一つあり、柄の木質が遺存する。30は、刃部のみが残存し鉋部も欠けている。現存長31.0cm、最大幅3.7cm、最大厚7.5cmを測る。31は鉈で、刃先と茎部が欠けている。現存長7.1cm、最大幅1.3cm、最大厚0.55cmを測る。茎部には、木質が遺存している。32は有袋鉄斧で、全長10.4cm、刃部最大幅5.4cm、袋部最小幅3.2cmを測る。全体の形は刃先部に向かって緩やかに弧を描きながら広がる。袋部の合わせ目は、刃部側は閉じているが柄側に向かうにつれて開く。袋部の断面は梢円形で、内側に木質が遺存している。



第8図 出土遺物実測図①



第9図 出土遺物実測図②



第10図 出土遺物実測図③

第1表 出土遺物観察表(土師器・須恵器)

()は反転復元件

遺物番号	種別 器種	法量(cm)		器面調査	色調	胎土	備考	
		口径	底径					
1 SC4	土師壺 高坏	18.5		内面:不明 外面:ミガキ	内面:にふい黄澄、一部黄灰 外面:にふい黄澄、一部黄灰	1ミリ以下の褐色の砂粒と、1ミリ以下の無色透明の光る粒子を含む		
2 SE1	土師器 甕	13.8	17.1	内面:ナデ・ハケメ 外面:ヨコナ・ハケメ	内面:橙 外面:にふい黄澄、一部橙	2ミリ以下の褐色の砂粒を含み、3~5ミリの赤褐色の砂粒を性かに含む	底部に焼付着	
3 SE1	上部器 甕	13.1		内面:ハケメ・ユビオサエ 外面:ハケメ・ナテ	内面:にふい黄澄 外面:橙・にふい橙・黒	2ミリ以下の白・黒・灰・赤褐・褐色の砂粒や細砂粒を多く含む	縫合付帯 黒斑	
4 SE1	土師器 甕	(11.4)	11.9	内面:ナデ・ハケメ・ユビオサエ 外面:ナテ	内面:橙 外面:橙・赤褐	2ミリ以下の白・黒・灰・褐色の光る砂粒や細砂粒を多く含む	内外面に赤彩	
5 SE1	土師器 甕	(8.4)		内面:ナデ・ハケメ 外面:ナテ・ミガキ	内面:橙・灰 外面:橙・黒	1ミリ以下の白・黒・灰・褐色の細砂粒を多く含む	内外面に赤彩 黒斑	
6 SE1	土師器 甕	11.4	1.7	内面:ナテ	内面:にふい黄澄、一部橙 外面:にふい黄澄、一部橙	2ミリ以下の黒・赤褐の砂粒と0.5~1ミリの光る無色透明の砂粒を含む		
7 SE1	土師器 甕	13.3	3.6	内面:不明 外面:ミガキ・ヨコナテ	内面:にふい橙 外面:明黄褐・褐灰・赤橙	3ミリ以下の光る黒・褐色・灰の砂粒を細砂粒に含む	体部に横円形の穿孔	
8 SE1	土師器 高坏	(21.1)	13.2	16.4	内面:ナテ・ヨコナ・ケズリ 外面:ハケメ・ナテ・ヨコナテ	内面:橙・褐灰 外面:橙・赤	3ミリ以下の白・黒・褐色・灰の光る細砂粒、砂粒、石英を多く含む	赤彩
9 SE1	土師器 高坏	(19.3)	11.4	17.2	内面:ミガキ・ナテ 外面:不明	内面:橙 外面:橙	1ミリ以下の白・黒の光る細砂粒を含む	
10 SE1	土師器 高坏	17.7	(12.7)	16.4	内面:ミガキ・ケズリ・ナテ 外面:ナテ	内面:橙・明黄褐 外面:橙・にふい褐色・黒	1ミリ以下の黒・灰の細砂粒を含む	赤彩 黒斑
11 SE1	土師器 高坏	17.4	11.5	13.9	内面:ケズリ・ナテ 外面:ミガキ・ナテ	内面:にふい橙・にふい黄澄 外面:にふい黄澄・にふい橙	1ミリ以下の白・黒・灰・褐色の細砂粒を多く含む	赤彩 口部に沈着
12 SE1	上部器 高坏	(19.9)	(12.5)	14.1	内面:ミガキ・ナテ・ヨコナテ 外面:ハケメ・ヨコナテ	内面:橙 外面:橙・赤	1ミリ以下の白・黒・灰・褐色の光る細砂粒と石英を多く含む	赤彩
13 SE1	上部器 高坏	17.5	(12.0)	13.2	内面:ハケメ・ナテ・ヨコナテ 外面:ヨコナ・ハメ	内面:橙・赤・灰黄褐 外面:橙・赤・褐灰	3ミリ以下の白・黒・褐色・灰の光る細砂粒、砂粒、石英を多く含む	赤彩
14 SE1	土師器 高坏	15.7	10.3	12.3	内面:ハケメ・ケズリ・ナテ 外面:ハケメ・ナテ	内面:にふい黄澄 外面:にふい性・一部明赤褐	2ミリ以下の黒・褐色の砂粒を多く含む	赤彩
15 SE1	土師器 高坏	17.5	11.4	13.0	内面:ナテ 外面:ハケメ・ナテ	内面:橙・明赤褐 外面:明赤褐・にふい黄澄	0.5~3ミリの白・黒・褐色の光る細砂粒や砂粒を多く含む	赤彩
16 SE1	土師器 高坏	(16.9)	10.3	13.0	内面:ナテ・ミガキ・ケズリ 外面:ナテ・ハケメ・ミガキ	内面:橙 外面:橙	1ミリ以下の白・黒・灰・褐色の光る細砂粒と砂粒を多く、3ミリ程度の砂粒を性かに含む	赤彩
17 SE1	上部器 高坏	8.6	12.0	14.9	内面:ナテ 外面:ハケメ・ナテ・ミガキ	内面:橙・にふい橙 外面:橙	0.5~3ミリの黒・褐色・透明白の光る砂粒を含む	赤彩
18 SE1	上部器 高坏	(11.3)			内面:ハケメ・ナテ 外面:ハケメ・ナテ	内面:橙 外面:橙	1ミリ以下の白・黒・褐色の光る細砂粒を多く含み、2ミリ程度の褐色の砂粒を僅かに含む	黒斑
19 SE1	土師器 高坏	17.6			内面:ハケメ・ヨコナ・ケズリ 外面:ナテ・ハケメ	内面:橙・にふい黄澄 外面:橙・明黄褐・黒・赤	2ミリ以下の白・黒・褐色・灰の光る細砂粒、砂粒、盐基灰・石英を多く含む	赤彩 黒斑
20 SE1	土師器 高坏	(17.6)			内面:ナテ 外面:ナテ	内面:橙 外面:橙	1ミリ以下の白・黒・灰の光る細砂粒を僅かに含む	黒斑
21 SE1	上部器 高坏	(19.8)			内面:ミガキ 外面:ミガキ・ヨコナテ	内面:明黄褐・黄褐・橙 外面:明黄褐・黄褐・赤褐・赤橙	1ミリ以下の黒・灰・褐色・透明の光る細砂粒を多く含む	赤彩・黒斑 口部に沈着
22 SE1	土新器 甕				内面:ハケメ・ナテ 外面:タキ	内面:灰・暗褐色 外面:灰・褐色	1ミリ以下の白・黒・灰・透明の光る細砂粒を含む	
23 SE1	須恵器 甕	8.8		11.0	内面:ナテ 外面:ケズリ・回転ナテ	内面:褐灰 外面:褐灰	0.1~1ミリの白く光る細砂粒を含む	自然釉
24 SE1	須恵器 甕	(12.2)			内面:ナテ 外面:ナテ・カキメ	内面:褐灰・浅黄・黄褐 外面:灰・油灰	白・黒・灰の細砂粒を含む	自然釉 暴指波状文
25 SE1	須恵器 甕				内面:ナテ 外面:ケズリ・ナテ	内面:灰 外面:灰・油灰	2ミリ以下の白・黒の細砂粒や砂粒を含む	自然釉 割み目
26 SE3	須恵器 甕				内面:ナテ 外面:タキ	内面:灰オリーブ 外面:暗灰	2ミリ以下の白い砂粒を僅かに含む	
27 SE3	須恵器 甕				内面:ナテ 外面:ナテ	内面:灰オリーブ 外面:暗青灰	1ミリ以下の白・黒・灰の細砂粒を僅かに含む	突起 暴指波状文

第III章 まとめ

今回の調査は土坑6基、溝状造構3条が検出されたが、造構はSC4、SE1を除いて微少の遺物しか出土しておらず、残る造構の時期を遺物から想定することは困難であった。SC1～3は後述するSC4、SE1と同様の埋土を有しているため、近い時期が考えられる。SC5・6は他の土坑と埋土と構築層位を異にしており、他造構より新しい時期が想定できる。また、SE2・3は、土坑群とは異なる基本層序V層に見られるスコリア若しくは軽石を含む埋土を行っている。今回の調査では、テフラ分析を行っていないためこのスコリア（軽石）の起源、時期を明らかにすることはできなかったが、後述するSC4、SE1構築後に造構構築、テフラが堆積しているため高原スコリア、文明軽石（註1）がその候補として考えられる。以上埋土状況と構築層位から考えられる本遺跡における造構の先後関係を整理するとSC1～4、SE1→SE2・3→SC5・6の順が想定され、大きく3時期に分けられる。

遺物について（高坏を中心）

本遺跡の出土遺物において最も出土量の多い器種は高坏である。特にSE1では全24点中14点が高坏と圧倒的な量である。その他の遺物も含め、SE1から出土した実測可能な遺物は埋上I層から出土し、面的にもまとまって出土しているため、一括資料として取り扱いたい。土器の甕1点、壺3点、碗2点、高坏14点、須恵器の甕の碎片1点、甕3点が出土している。甕は一般的なものに比べ小振りである（1）。焼成後に施した底部穿孔の壺（3）、碗でも体部に穿孔を施すもの（7）がみられる。

この時期における高坏は坏部が浅い→深い、体部稜有→稜無、脚柱部エンタシス状になるもの→ならないもの、脚柱部と裾部間に稜有→稜無、裾部が内湾して開くもの→直線的、外反して開くものと変化を遂げるが、本遺跡の個々の高坏を見てみると古相の高坏、新相の高坏というライン引きはできず、各部位によって古相、新相を折衷した特徴がみられる。SC4では高坏は坏部のみの出土であるが、SE1出土の坏部に比べ体部の稜が明瞭に見られるため、SE1よりも古相の特徴を示している。よって本遺跡を3時期に大別したが、初段階の時期を2分してSC4を1期、SE1を2期に設定したい。具体的にはSE1は出土處（23～25）からTK208段階併行に比定出来る。

SE1について

今回の調査では調査面積の制約等から造構の性格を捉えることが難しかった。

SE1は調査区中央を南北方向に弧を描きながら走り、南側端は攪乱によって破壊され、その延長上は不明で、北側は調査区外となる。最大幅1.4m、深さ20cmを測る。前段で述べたとおり、穿孔を施す甕や碗、多数の高坏等の出土遺物や溝の形態から円墳の周溝を考えたい。墳丘の直径は遺存する周溝から直径9.2～10.2mと推定される。また、調査区北東部のIV層黄褐色砂質土（攪乱土）内からは直刀2振り、鉗、有袋鉄斧が出上しており、古墳推定径の中央付近から出

土していることから、古墳主体部崩壊によって混入したものと考えられる。

江田原第3遺跡が所在する一帯には16基の高塚古墳が点在している。これらの古墳群は未指定で、必ずしも良い保存状態とは呼べず、幾つかの古墳はすでに消滅してしまっている。それらは南北3.8km、東西2.1kmの範囲にわたって広く分布し、大きく分けると南側の砂丘先端部分に7基（本遺跡SE1を含む）、北側の砂丘幹部周辺に7基、新別府川左岸に1基存在し、それらの中間に存在していない。さらに立地条件を加味して分類すると、第1砂丘南端に5基、第1砂丘南端東側水田地帯に2基、第1砂丘西側新別府川左岸に1基、第1砂丘基幹部に4基、第1砂丘基幹部西側水田地帯に1基、第2砂丘基幹部に3基が所在する。

第1砂丘南端の5基については現段階で橢第1号（纏向型類型）から本遺跡SE1（TK208段階）に涉る長期間の古墳群の構築が想定できるが、他域に分布する古墳については時期が不明であるため、広範囲に分布する古墳を一連の群として捉えることは現状では憚られる。

しかし、多くの古墳が日向灘を一望できる好条件の砂丘上に立地していることが注目でき、一體的な海洋に対する意識を想起させる。また、近年には第2砂丘中央付近で布留期の集落である猿野遺跡も調査が行われており、砂丘上の生活形態、これらの古墳との関連性も窺える。さらに、平成12年度には、新別府川右岸の北中遺跡（註2）で平野部沖積地では稀な地下式横穴墓10基が検出され、大淀川下流域海岸部付近での古墳時代の墓制を再認識させる状況となっている。

先述したとおり、これら高塚古墳の構築時期など不明な点が多いが、今回の調査で今まで知られていなかった古墳の存在が明らかになったことにより、周辺に存在する高塚古墳についても立地等について再確認することができた。広範囲に分布する古墳の中間の空白地帯が、今後、今回のような調査によってさらに確認され、群として認識されるものか否か、今後の付近での調査例を待ちたい。

最後になりましたが、発掘作業に携わって頂いた作業員の皆様方、並びに、調査に際し、ご協力頂いた周辺住民の皆様方に心からお礼申し上げます。

古墳名称	所在地	墳形	全長（現況）	時期	備考
橢第1号墳	吉村町江田原	前方後円墳	全長55.0m 前方部幅18.0m 後円部幅35.0m 後円部高4.0m	纏向型類型	
2. 名称無	新別府町龍	円 墳	直径8.4m 高さ2.0m		
3. 名称無	吉村町江田原	—	—		消滅
4. 橢第2号墳	新別府町龍	前方後円墳	全長53.8m 前方部幅24.6m 後円部高4.7m		
5. 矩占墳	新別府町池間	—	—		消滅
6. 橢第3号墳	新別府町上田	円 墳	直径33.0m 高さ0.8m		
7. 橢第4号墳	山崎町下ノ原	円 墳	直径8.0m 高さ1.8m		
8. 橢第5号墳	山崎町下ノ原	円 墳	直径19.0m 高さ1.8m		
9. 橢第6号墳	山崎町下ノ原	円 墳	直径19.0m 高さ1.8m		
10. 村角第7号墳	村角町長山	—	—		消滅
11. 村角第8号墳	村角町長山	—	—		消滅
12. 大島第9号墳	大島町本村	円 墳	直径4.5m 高さ0.6m		
13. 高屋神社第10号墳	村角町誠尊	前方後円墳	不明		
14. 村角第11号墳	村角町牛田中	円 墳	直径18.0m 高さ3.5m		
15. 名称無	村角町宍兵衛畠	—	—		消滅
16. 江田原第3遺跡SE1	吉村町江田原	円 墳	直径9.2~10.2m	TK208段階	
17. 北中遺跡	吉村町北中	地下式横穴墓	10基（玄室形態 平入5基 妻入3基 不明2基）	註2	

第2表 江田原第3遺跡周辺古墳一覧（註3）



第11図 江田原第3遺跡周辺古墳分布図（註3）（1/25,000）

（註1）高原スコリアは高千穂火山御鉢火口起源、噴出年代は10～13世紀。桜島文明絆石は桜島火山起源、噴出年代は文明3年（1471）。

（註2）地下横穴墓はTK43～TK209段階併行が考えられ、この他、5世紀中葉～7世紀初頭の堅穴住居16軒が検出された。2002年報告書刊行予定

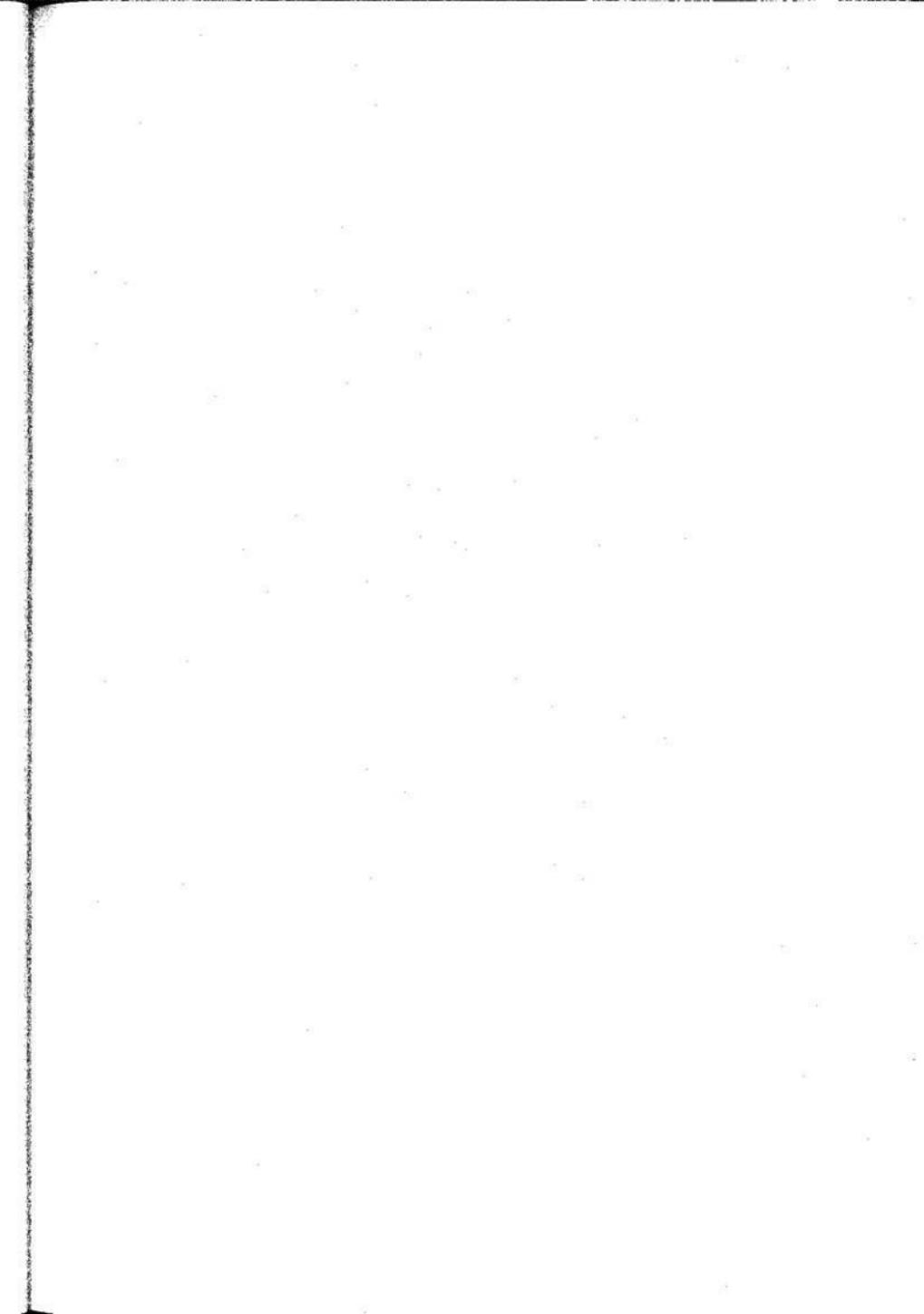
（註3）第2表、第11図は宮崎県史、宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅱを参照の他、平成13年度再調査した結果を含む。

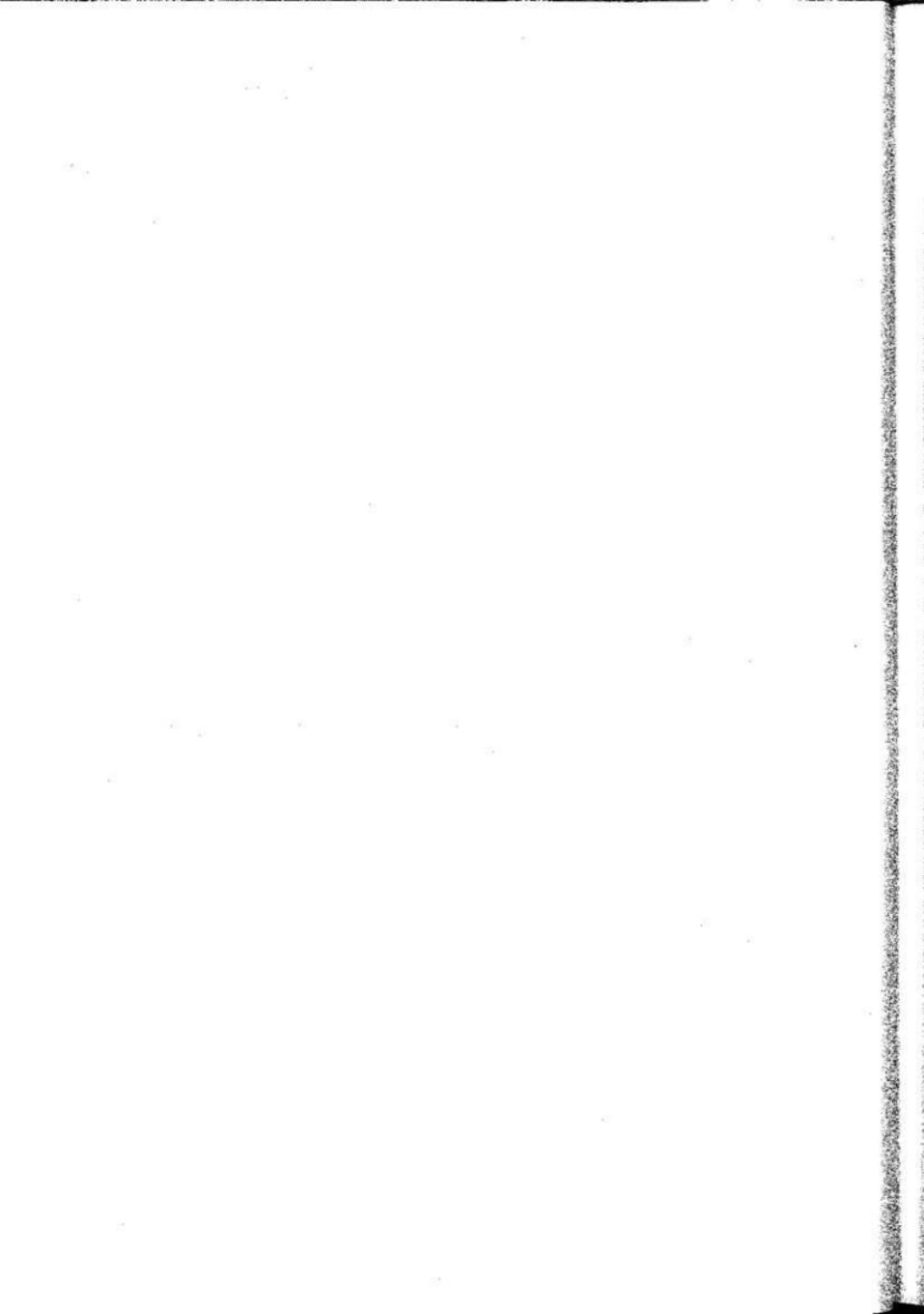
【参考文献】

宮崎県 「宮崎県史」 通史編 原始・古代 1997 宮崎県 「宮崎県史」 資料編 考古2 1993

田辺昭三 「須恵器大成」 1981 新富町教育委員会 「上箇遺跡II地区・溜水第2遺跡」 1995

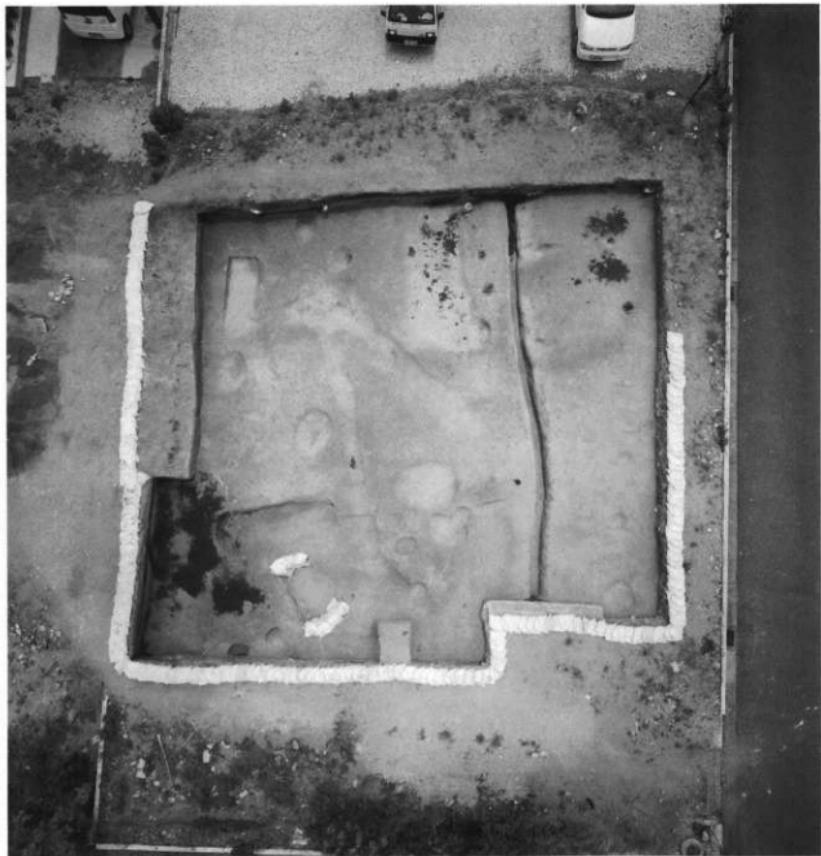
宮崎市教育委員会 「宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅱ」（リゾート地区を中心として） 1990



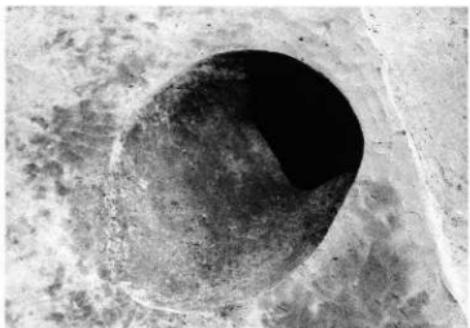




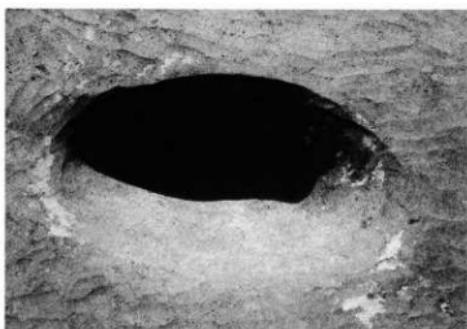
図版1 江田原第3遺跡周辺



図版2 江田原第3遺跡全景



図版3
SC1 完掘状況



図版4
SC2 完掘状況



図版5
SC3 完掘状況



図版6
SC4 遺物出土状況



図版7
SE1 遺物出土状況①



図版8
SE1 遺物出土状況②

図版9
SE1 遺物出土状況③

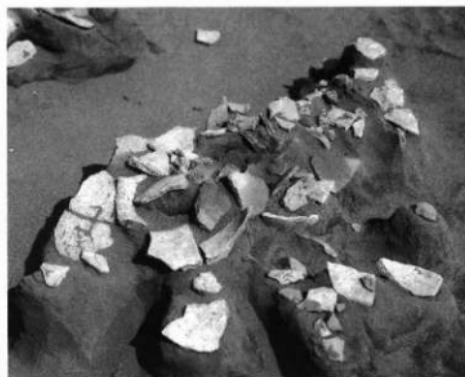


図版10
SE1 遺物出土状況④



図版11
SE1 遺物出土状況⑤





図版12
SE1 遺物出土状況⑥



図版13
SE1 遺物出土状況⑦



図版14
SE1 遺物出土状況⑧

圖版15
SE1 遺物出土狀況⑨



圖版16
SE1 遺物出土狀況⑩



圖版17
SE1 完损状况

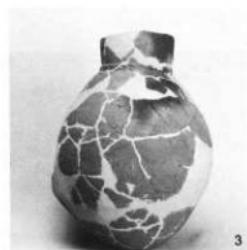




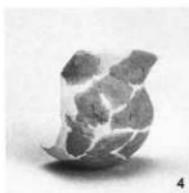
1



2



3



4



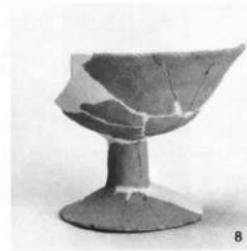
5



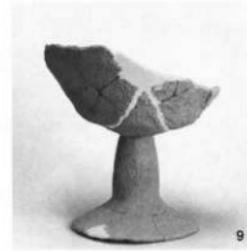
6



7



8



9



10



11



12



13

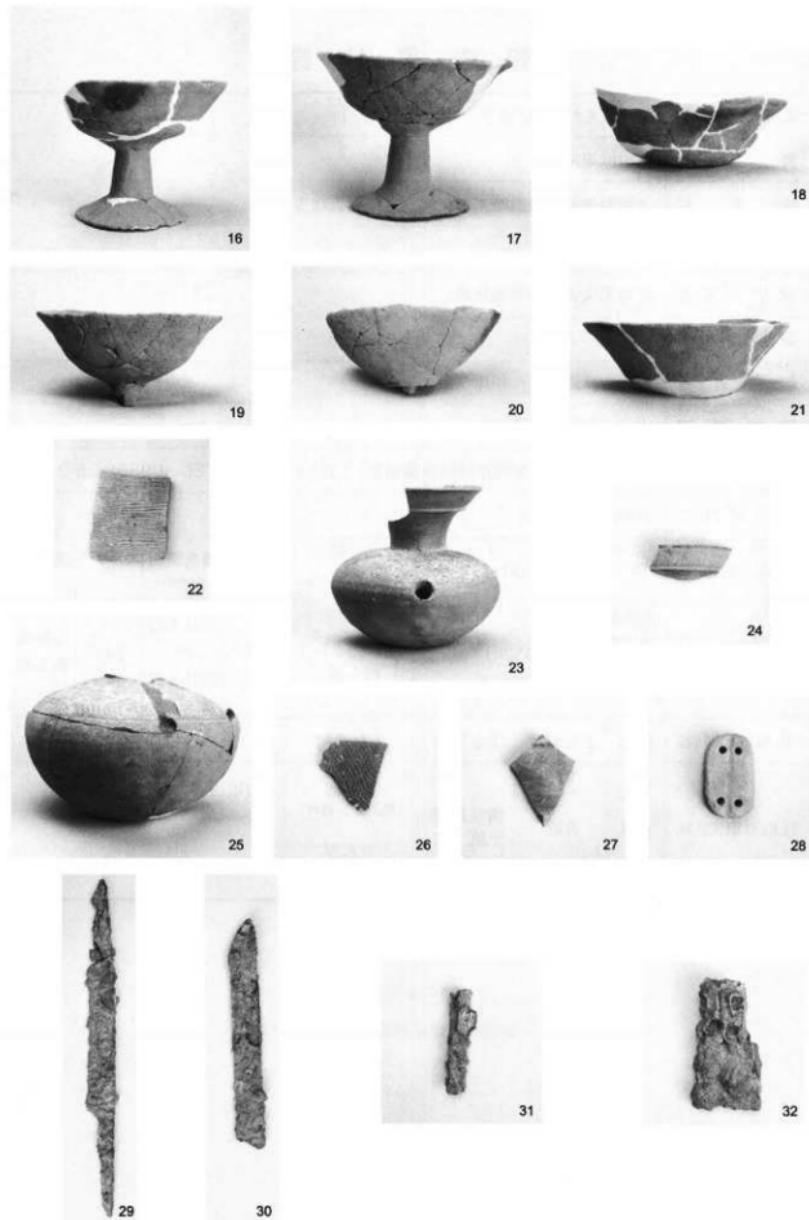


14



15

图版18 出土遗物①



圖版19 出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	えだばるだい3いせき						
書名	江田原第3遺跡						
副書名	北緯現通線道路改築工事に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第50集						
編著者名	福岡 洋道 川原 愛						
編集機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL (0985) 25-2111						
発行年月日	2002年1月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
えだばるだい いせき 江田原第3遺跡	みやざきけんみやざきし 宮崎県宮崎市 よしむらちょうえだばる 吉村町江田原 こう ほん 甲207番12	45201	31 55 37 付 近	131 26 59 付 近	2001.4.23 ~ 2001.5.22	244	道路改 築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
江田原第3遺跡	古墳	古墳	溝状遺構 土坑	上師器 (壺、壺、高杯) 須恵器 (壺、壺、壺)	古墳周溝 (TK208段階)		

宮崎市文化財調査報告書第50集

江田原第3遺跡

2002

発行 宮崎市教育委員会